

平成29年度 小平市立 十一小学校 学校評価報告書

学校教育目標		○かしい子 ○つよい子 ◎やさしい子	自ら学び、考えて行動し責任をもつ子 めあてを決めて最後までやりぬく子 友だちと仲よく協力し合う子(平成29年度の重点)					
目指す学校像(ビジョン) 【目指す学校像】 児童にとって、安全で楽しい学習・生活の場であること、いじめのない、児童がより良く成長する、ぬくみのある学校を目指す。 【目指す児童・生徒像】 主体的によりよく問題を解決する能力、思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、逞しく生きるための健康と体力をもつ児童を目指す。 【目指す教師像】 全ての教職員が全ての児童の担任であるという自覚をもち、児童一人一人を大切に、授業力・指導力の向上に努め、資質を高める教師を目指す。								
前年度までの学校経営上の成果と課題 学校長の経営方針の実現に向けて、体育の研究をし、運動の魅力を感じ取り、自ら運動に取り組み、体への気付きを大事にして運動を楽しめる児童の育成を目指して教育活動を進めた。90%以上の児童が運動に親しんでいるとアンケートに回答するなど、成果は着実に上がってきている。また、関係者評価でも肯定的な評価をいただいたとともに、教職員、各自が体育の授業改善に取り組み、授業力を向上させることもできた。しかし、学校評価の児童のアンケートによると、悩みや不安を大人に相談できている児童が7割程度に留まるなど、情意面では不安定な要素をもつ児童も少なくないことが分かっている。今年度は学校教育目標を「つよい子」から「やさしい子」に指導の重点を変更して、全学級で「いのちとこころの学習」を実施し、児童の自尊感情を育み、一人一人の自立心を養成していく。また50周年に向けて、児童にこれまでの50年とこれからの50年のつながりを周年記念行事等で感得させ、今を生きる誇りと、未来に向けての希望をもたせていく。このように全教職員で「やさしい子」の育成を目指し、努力し保護者・地域の方々からより一層信頼される年としたい。								
	具体的方策	第1回評価		課題と対策	第2回評価		学校関係者評価	課題と次年度以降の対策
		努力目標	成果目標		努力目標	成果目標		
学力向上	①授業の開始時刻・終了時刻を守る ②授業の始めと終わりのあいさつを確実に行う。 ③「はい」「立っ」「です」のルールを徹底する。	3	4	授業時刻を守り、開始、終了のあいさつを実施できている。ただし、「はい」「立っ」「です」のルールの定着具合については、学級差が見られる。学年主任を中心に学年間で身に付けるべき学習規律を共通理解し、交換授業や多難授業(短時間)などを行い、児童の学びがより活性化された学習規律の定着を目指す。	3	3	・学校全体での取組として教員が意識をし、授業開始時刻、終了時刻が守られている。	昨年度、児童の授業終了のあいさつが、正しくできていないことが問題として上がっていた。今年度は、正しいあいさつについて各学年、各学級で共通理解のもとに指導を行うことができ、どの学級でも正しい授業終了のあいさつができるようになったことが教員アンケートで確認された。来年度も、新しい教員が入り、指導の方法をさらにOJTのグループ研修等であいさつが行い方の共通理解を行い、指導の徹底を確認する。
	①東京ベーシックドリルを定期的に行う。(朝学習活用) ②問題解決学習では自力解決の時間を確実に保障する。	3	3	自力解決の時間確保については、概ねできている状況である。課題は、習熟にますます見られる児童への個別の課題を把握し、指導と支援を行うことである。今年度からますます見られる児童を対象とした補習を年に6回実施する。児童の基礎学力の向上につながるよう工夫して指導を行う。	4	3	・授業の初めと終わりのあいさつが気持ちよく行われており、けじめがきちんと付けられている。	第1回の評価の際に出された課題を受けて、基礎の習熟を目指すクラスで東京ベーシックドリル等を活用しながら、基礎基本を身に付けさせる指導の充実を行った。さらに、今年度は、補習を年間通じて行い6回に回数を増やして、時間の確保も行った。また、自力解決の時間の確保は実施されており、来年度も継続的に実施できるように問題解決的な学習の進め方を年度当初に算数の担当者が教員に行う。
健全育成	①年3回のあいさつ運動に取り組み。 ②毎朝、教室や玄関で児童を迎え、教職員自らあいさつをする。	3	4	教員アンケートの結果、あいさつに対する評価(A、B)が数値的にも高くなった(60→85%)。同様に、児童のアンケート(82%)、保護者アンケート(88%)と8割以上が肯定的な評価である。課題は、どの対象者のアンケートでもA評価(よくてはまる)が少ないので、自ら進んであいさつをする児童の育成を保護者、地域、教員が連携して指導し、励ましていく。	4	4	・登下校中に通学路で出会った時、あいさつをできる子が増えてきている。	朝、担任は児童が入室する前に教室に入り、児童にあいさつを率先して行うことを日々実施した。朝のあいさつについては、元気に教員に対して行うようになった。また、自ら行うこと、校外での自発的なあいさつにつながっているのかという点については、課題が残る。来年度は、児童の自発的なあいさつができてくる児童も多くなるので、それらの児童を手本に具体的な手だてを考案実行していく。
	①いじめ見逃しゼロに向けて児童へのアンケート調査を実施する。 ②早期解決に向けて毎週生活指導連絡会を開催する。	3	4	昨年度から始めた児童中心の活動を奏し、児童のいじめゼロに対する意識が高まってきている。また、アンケートによると、学校内の大人に相談できていると答えた児童が全校児童で10%程増えてきている。ただし高学年児童(特に6年)については、相談しにくい(28%)と答えている。そのため、担任を中心にしてSC等と連携して児童が心を開き、悩みなどを相談できる環境を整える。	4	4	・あいさつは元気でよいが、児童から進んで、あいさつをしてくれることは、少ない。	教員アンケートでは、児童がいじめ等の問題に関わり、解決しているという態度が育まれていると答えが多かった(肯定率100%)。例年通り「いじめアンケート」を児童に年3回実施して、そのアンケートをもとに1人1人と教育相談を担当を行い、気になる児童へのケアを即応的に行ってきた。来年度は、SCとの相談を児童が自発的に活用できるように環境を整えていく等、児童がより教育相談を受けやすい状況を上記以上に作り、実行していく。
健康づくり	①体づくり運動の指導を研究成果を基に実践する。 ②体力向上旬間を設け、運動の日常化を目指す。	2	4	アンケートによると体力づくりができていると答えた児童が87%であった。児童が意欲的に体育の授業に取り組んでいる成果が出ている。また、更なる運動の日常化を目指す。今年度途中から月一度の体育朝会を行い、多様な動きを紹介し、全校で行っている。努力目標の評価が「2」に留まっている。昨年度までの研究成果を授業に生かすような学習を2学期以降、積極的に実施する。	3	4	・「親子DE運動」は、家庭で運動を習慣化するきっかけとなる活動である。	学校評価アンケートによると、親子参加型体育授業が保護者、児童に好評(87%)であり、教員も好印象を手応えを感じていることが分かった。今年度は10月の学校公開週間に1度行ったが、来年度は実施回数を増加させることも含め、さらに学校と家庭とが連携して児童の体力向上を支援し、継続的に、効果的に高められる環境と体制づくりを整えていく。
	①学校公開時に親子de運動を開催するなどして家庭での運動の実施に取り組みよう啓発する。 ②なわとびや長縄、持久走などに関する体力向上旬間を設け、運動の日常化を目指す。	2	4	児童、保護者からのアンケートでの評価(9割以上肯定)は高く、活動が定着できていることが分かった。また、今年度から体育館の中体目使用について曜日別に学年ごとに割り振り、運動する場所と機会をこれまで以上に確保できた。さらに、楽しみながら運動に親しむ運動体験活動の実施について、体育行事委員会が検討に入っている。	4	4	・「十一小ギネス」や「なわとび検定」は、児童の目標となり意欲を高めるよい方法だと思う。	具体的な方策について、計画したものを全てを実施することができた。また、休み時間の体育館の使用については児童、教員ともに慣れ、有効的に活用することができている。児童の日常的な運動の機会が確保されている。ただし、体づく運動の多様な動きを含む運動種目の体験日中体目等で実施する予定であったが、実施できなかった。体育行事委員会を中心に話し合い、来年度、実施する。
特色ある学校づくり①	ゲストティーチャーの招聘など、外部人材を活用した授業を定期的に実施する。	3	2	例年通り、地域の方々との活動を年間計画に基づき、実施している。昨年度の反省を生かし、活動の引き継ぎや打ち合わせの時間を学年会として確保し、計画を十分に練り、活動内容等を確認することができた。交流先との連絡先もデータベース化されている。今年度、運動会があり1学期に盛り込むことができなかった計画を、次年度は1学期に行い、学期ごとに偏ることなく実施できるように見直す。	4	3	・卒業生や地域の協力を得て、大変よく実施しており、地域と連携した教育活動を進めている。	例年通り、地域の方々との学習を計画的に実施できた。昨年度、課題として上げられていた交流先の連絡先のデータベース化を今年度完了し、本校教育計画に沿って、地域と関わりをもつ授業を年間通じて実施できた。来年度は、コミュニティスクール準備委員会にも地域と連携した教育活動をさらに推進できるように計画書等を出して、教育的な支援を保護者、地域の方にしてもらえるように話し合い、実践できるものから随時、実施していく。
	コミュニティ・スクール準備委員会を立ち上げ、組織基盤を構築する。	4	3	コミュニティ・スクール準備委員会を立ち上げるための準備組織を作り、地域の方、PTAの方、本校教職員で話し合いを月1回のペースで実施している。また、OJTの一環として、本校教職員対象としたコミュニティ・スクールに関する講演会を開催する。コミュニティ・スクールの指定を先行して受けている近隣小学校の教職員や地域の代表者に直接、話を聞く場を設けて、コミュニティ・スクールとしての学校の役割、地域との連携等を学ぶ。	3	3	・学校公開や学校行事、各学年の特色ある教育活動に保護者が積極的に参加している。	上記したように、コミュニティ・スクール準備委員会を立ち上げ、地域の教育力を生かし、児童の成長を促すことができる体制を整えられるように、月一回のペースで会を開催していく。校内の受け入れ体制や地域の人材の発掘を再来年度のコミュニティ・スクールの本格実施に向けて準備を進める。同中学校区の六中や七小とも連携して、両校の取組にも学び、児童、生徒の学びがより高まり、個々の育ちにつながっていく方策を具体的に考えていく。
特色ある学校づくり②	いのちとこころの学習の実践を図る。	3	2	「いのちとこころの学習」の実践については、保護者アンケートによると定評が3割いるなど、具体的な学習の内容や主旨が保護者に伝わっているとは言いがたい。研究授業を年に4回実施し、授業の改善を進めるとともに、夏季休業中に各学年ごとに具体的な学習単元計画を作成し共通理解して、意図的に計画的に実施できるようにする。	3	4	・学期初めに命の尊さについて考え、発達段階に応じた学びをすることは、大切である。	「いのちとこころの学習」の実践が2学期以降、本格化されて各学年の授業が行われた。研究授業を実施し、授業を見合ったり、学習のねらいの各学年の系統性についての話し合いを教員で行った。授業では、保護者や地域の方々との連携や協力を得ながら、本校の特色ある教育活動として展開した。来年度は、今年度は、今年度、各学年が設定した目指す児童像を実現するための具体的な方策を立て、研究を深めていく。
	①六中学区における小・中連携教育に関する取組を実施する。 ②幼稚園・保育所と連携した取組を実施する。	2	2	今年度、各分科会の話し合いで決定した具体的な取組を各分科会リーダーが本校教員に周知し、全校共通の取組として実施する。本校のSC認定に向けて、七小、六中のSCの実践の特色や成功例等を知り、そこから適宜、学ぶ。2学期以降、交流会がより充実した活動になるために以下の点に留意して活動を進めていく。1.有意義な交流になるように活動の目的、意義を意識させる事前、事後の指導と力を入れること。2.交流団の職員との綿密な事前の打ち合わせすること。	3	3	・本校では特色ある素晴らしい取組がたくさんある。その教育活動を更に情報発信してほしい。	年間計画に基づき、充実した活動を実施できた。1年生、5年生がそれぞれの発達段階、児童の個々の思いに合った活動を行うことができた。課題は、このよき伝統として行われている交流会が継続して実施されていくことである。新しい学年の担任に引き継ぐことができるように校内学習フォルダに資料等を保存する。また、実施時期、活動内容等が固定化されているので、柔軟に変更や刷新を行い、新しい展開を模索していくことも話し合い、来年度の充実した活動に生かす。